

実習報告（異校種実習）

授業におけるコミュニケーション活動の研究

江島 薫（授業実践探究コース：現職教員）

1. 探究実習のテーマと設定の理由

高等学校公民科においては、国内外における政治や経済の原理及び制度、課題、先哲の思想について、知識として理解することを中心に授業が行われてきた。このため、授業においては、日常的に、議論や意見発表などのコミュニケーションに基づく学習活動を取り入れてこないままであった。

一方で、少子高齢化やグローバル化に伴う経済や安全保障体制の変化、憲法改正の是非、労働環境の改善、累積する財政赤字の問題等、解決困難な課題が社会にある中、若い世代の人々や私たちは生きていかなければならない。主権者として課題に向き合い、解決しようとする社会的実践力の育成を図るためにも、高校公民科の授業においてもコミュニケーションによる協働活動の展開が望ましい。コミュニケーションとは、ハーバーマスのいうコミュニケーション的行為としての「議論」である。

以上の理由から、研究テーマを「主権者を育む公民科協働学習の研究—コミュニケーションを原理とする授業開発を中心に—」と設定し、探究実習テーマを「授業におけるコミュニケーション活動の研究」と設定した。実習においては、中学校社会科授業において営まれる議論がコミュニケーション活動としてどのような意味があるのかについて明らかになるよう、以下の2点について追究しようと計画した。1点目は、授業実践の中でコミュニケーションによる他者との活動が協働学習として、単元の中でどのように位置づけられ、どのような形態で取り入れられているのかである。2点目は、協働学習を取り入れた単元のパフォーマンス課題をどのように設定するのかである。

2. 探究実習の研究目標

- ①ディスカッションなどのコミュニケーション活動が協働学習を促す過程を考察する。
- ②単元毎、単位時間毎に取り入れるコミュニケーション活動のあり方を検討する。
- ③コミュニケーション活動を活発にするための、パフォーマンス課題の設定方法を学ぶ。

3. 探究実習の概要

実習は佐賀大学教育学部附属中学校で行った。9月に連続2週間、10・11月は週1回の実習であった。授業実習は3年1・2組の2クラスで行った。また、学級活動や文化発表会リハーサル等の学校行事に参加して生徒とのコミュニケーションを図りつつ、中学校での教育活動の実態把握に努めた。

探究実習の方法として、授業観察、授業実践、授業分析の3点に留意した。

1点目は、授業観察の方法として、メンターの野田教諭の授業を2つの理論に依拠して捉えた。1つ目の理論は、正統的周辺参加論である。理由は、野田教諭は、学校共同体を現実社会に開き、解決困難な社会の課題を用いて学習することで、社会科での学びを真正（オーセンティック）の学びとされているからである。正統的周辺参加論における学習とは、共同体への参加である。共同体への参加を通じて、個人はアイデンティティを形成し、何者かになる。よって、共同体に参加し、所属することなしには学びは成立しない、とする。現実社会に開かれた社会の授業に授業者と生徒が参加すれば、学習が進む。以上のことを踏まえて授業を捉えた。

2つ目の理論は、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論である。この理論に依拠し、ペアワーク、グループやクラス全体の議論を捉えた。授業において見られたコミュニケーション的行為について、対話については、対話に参加している生徒同士が了解するための妥当要求として、真理性（発言の内容が命題に対して真であること）、正当性（発言の内容が規範に照準して正当であること）、誠実性（自己の本意を語っていること）が掲げられていることである。このため、生徒同士の対話における発話行為を、真理性、正当性、誠実性の観点から捉えた。

2点目は、授業実践の方法として、野田教諭が設定された単元を、2クラスで3時間ずつ担当した。3年1組では、内閣の役割と「首相の専権事項は許されるのか」について考えた。また、パフォーマンス課題「憲法改正の是非」に向き合い議論をし、意見文を書くという、それぞれの単位時間を担当した。3年2組では、基本的人権を保障する権利、国会の地位と機能の授業を担当した。それぞれのクラスにおいては、生徒との対話、生徒相互のコミュニケーション活動に向き合うことに留意した。

3点目は、授業の分析方法として、質的分析により授業分析を行った。3年1組の授業実践時に得たで映像データからトランスクリプトを作成、ワークシートの意見文をエクセル入力し、表にした。

4. 探究実習の成果と課題

実習での授業分析を行い、2点の成果が得られた。

1点目は、授業における生徒の議論は、議論の中で自分の意見を高められる行為調整と見ることができる。議論における生徒の対話分析から、生徒の発言は妥当要求が掲げられており、それぞれの発話は真理性、正当性、誠実性のいずれかの側面の特徴が強く表れていた。つまり、理想的発話状態が見られており、授業における議論もコミュニケーション的行為であるといえる。そして、生徒や授業者相互に行為調整が促され、生徒同士が互いに自己を作り出す学習の可能性へとつながる。

2点目は、生徒同士が互いに自己をつくり出す学習が可能であることである。レイヴとウェンガーが提唱する正統的周辺参加論によると、学習は自己と世界をつくる。議論では、言葉が意味をもって生徒の意見を変容させ、結果として生徒相互の意見を作った。特に、教師と生徒、生徒相互の間には、視点の多様性を共有できた。議論において学習することは、様々な意見の共有によって共同体の一員となることであり、多面的・多角的な社会の見方・考え方を育て、アイデンティティの形成を促す。

課題としては、議論で育まれる学力とは何か、が実習中に明確ではなかった。このため、議論でどのような学力を授業で育むのか、パフォーマンス課題をどのように設定するのか、をうまく捉えられなかった。実習においては、議論で育む学力は何かを具体的に明らかにしないまま授業を行った。

新学習指導要領には、思考力・判断力・表現力等を「主体的・対話的で深い学び」により養う、とある。議論で育まれる学力が明らかになると、高等学校公民科の授業を以下のように再構築できると考える。議論などのコミュニケーション活動を取り入れた単元構成や授業内容の開発が行われ、生徒の社会の一員として必要な資質・能力や多様な学びを評価し、成長を観ることができる授業となる。

そのために、ハーバーマスのコミュニケーション的合理性(対話的合理性)についての理解を深め、来年度の授業実践と往還し、議論によって授業参加者間に育まれる学力を明らかにしたい。そして、正統的周辺参加論に依拠する学習において、授業参加者に共有される学力との関連を明らかにしたい。

参考文献

- ・ユルゲン・ハーバーマス、1985、『コミュニケーション的行為の理論 [上] [中]』（訳・河上倫逸他）、未来社。
- ・G・レイヴ/E・ウェンガー、1993、『状況に埋め込まれた学習』（訳・佐伯胖）、産業図書。